

# 夕顔・葵の上・一條御息所・紫の上の 死期についての一考察

金賢貞\*

---

## 目次

---

1. 序
  2. 『源氏物語』正編における死者について
  3. 夕顔・葵の上・一條御息所・紫の上の死期について
  4. 四人の死期を構成した作者の意圖について
  5. 結
- 

## 1. 序

昔から『源氏物語』における「物の怪」についての論文も、「死」についての論文も大變多く、この二つの事柄は『源氏物語』の中で重要なテーマとして、絶えず研究されてきた。物の怪は、平安當時病氣や死の原因として考えられていたし、『源氏物語』の中でも物の怪に取り憑かれたために死を迎えた人物は少なくない。物の怪のために死んだ登場人物について研究する場合、部分的に物の怪と死を結びつけて考える場合もある。しかし、「物の怪」と「死」という二つのテーマを直接結びつけて考察するという試みはあまりない。

私がこの二つのテーマを結びつけて考察してみようと思ったのは、最初は「死」というテーマへの個人的な興味からだ。死」というものと、當時死の原因とされていた「物の怪」との接点について考えることで、「物の怪」というものへの新しい発見ができるのではないかと思ったのである。

死と物の怪との接点については、いろいろな角度からの考察が可能であるが、本稿では『源氏物語』正編における死者の亡くなった死期に重点をおいて考察する。この死者達の死

---

\* 韓國傳統文化大學 助教授 日本古典文學及び民俗學

期と物の怪との関わりの中に、紫式部が意圖的に構想したと思われる興味深い特徴があるので、私はそこに焦点を当てて考察してみたいと思う。

## 2. 『源氏物語』正編における死者について

平安時代には、宿世や無常などの佛教思想が、単なる信仰の次元を越えて日常生活の中にすっかり溶け込んでいた。そのため、現世よりも死後の世界に心の安住を求めるという傾向が強かったのである。

そのような時代に生きた紫式部の手によって書かれた『源氏物語』の中でも、死は非常に重要な位置を占めている。登場人物達の死を通して物語が新たな展開を見せたり、ある人物の死が他の人物の物語に大きな影響を與えたりして、物語の中で様々な役割を果たしているのである。

『源氏物語』に描かれている死は、ほとんどが老衰による自然死か病氣や出産などが原因となっているものである。自殺などのように、自分で自分の命を絶つということはまず見られない。唯一の例外として浮舟が入水をはかったことがあるが、これも結果的には失敗に終わっている。佛教思想の影響のせいか、平安貴族の間で自殺という行爲は許されず、現世からの逃げ道としては出家が存在していたのである。

現代の常識から見ると全く有り得ないようなことも、『源氏物語』では嚴然たる事実として存在する。例えば、『源氏物語』に出てくる登場人物の死が、必ずしも物語の世界におけるその人物の最後を意味するのではないということがあげられる。単に周りの人々の思い出話とかに故人が登場する場合もあるが、『源氏物語』では死んだ人が死霊という形で再び物語の世界に登場するのである。その代表的なのは夢の告げに現われた亡霊達で、七つの例がある。この亡霊達は、みんなこの世に残した子への執着のために現われたのである。

『源氏物語』では、このように死者達が霊となって夢の告げに現われる場合もあるが、もう一つ、死後の世界から死者達を再び物語の世界に登場させるのに、「物の怪」という手段が使われている。『源氏物語』正編では六條御息所の物の怪があるし、宇治十帖では浮舟に取り憑いた某法師の物の怪がある。いずれも物の怪として現われて、生きている人の物語に大きな影響を與えているのである。

死と物の怪との関わりはそれだけではない。現代では、人間の死に物の怪を結びつけて考える人はほとんどいない。死は人間の力ではどうすることもできない絶對的な自然の攝理であるが、平安時代において、物の怪はその死をもたらす一つの原因として考えられていたのである。當然紫式部もそのような考え方を持っており、『源氏物語』の中でも物の怪のために死を迎えたとされる人物は少なくない。

『源氏物語』において、確かに死と物の怪は非常に密接な関わりを見せているが、一方必ずしもそうではない場合もある。例えば、桐壺更衣・桐壺帝・藤壺中宮などについては、その病と死について物の怪のことが全く言及されていない。つまり、『源氏物語』の登場人物達の死が、すべて物の怪と関わりを持っているわけではないのである。このように『源氏物語』には、物の怪と非常に緊密な関わりを持っている死もあれば、全く別の次元で取り扱わなければならない部分もある。

本考察では死者達についての本格的な考察は避けて、死期と物の怪との関わりの中で特に興味深い一連の共通点を見せる四人を中心に考えてみるつもりであるが、その前に死者達の死期について整理してみる必要がある。

『源氏物語』の正編の中で亡くなったとされる人物は、全部で二十四人いる。資料1の表を参照してほしい。

<資料1 - 『源氏物語』の正編で亡くなった死者とその死期>

人物	亡くなった時期	巻
(1) 桐壺更衣	夏	「桐壺」
(2) 桐壺更衣の母	不明	「桐壺」
(3) 母后(藤壺の母)	不明	「桐壺」
(4) 指食女	不明	「帚木」
<b>(5) 夕顔</b>	<b>八月十六日</b>	「夕顔」
(6) 紫の上の祖母の尼君	九月二十日頃	「若紫」
<b>(7) 葵の上</b>	<b>八月十四日頃</b>	「葵」
(8) 桐壺院	十一月一日頃	「賢木」
(9) 右大臣(弘徽殿大後の父)	三月十三日以後	「明石」
(10) 六條御息所	秋頃	「落標」
(11) 左大臣(葵の上の父)	春頃	「薄雲」
(12) 藤壺	三月以後	「薄雲」
(13) 桃園の式部卿の宮(朝顔の父)	五月以後	「薄雲」
(14) 三條大宮(葵の上の母)	三月二十日	「藤裏葉」
(15) 北山の僧都	不明	「若菜下」
(16) 弘徽殿大后	九月	「若菜下」
(17) 柏木	二月	「柏木」
<b>(18) 一條御息所(落葉の宮の母)</b>	<b>八月下旬頃</b>	「夕霧」
<b>(19) 紫の上</b>	<b>八月十四日</b>	「御法」
(20) 光源氏	不明	「幻」～「匂宮」間
(21) 朱雀院	不明	「幻」～「匂宮」間
(22) 螢宮	不明	「幻」～「匂宮」間
(23) 頭中將	不明	「幻」～「匂宮」間
(24) 鬚黒	不明	「幻」～「匂宮」間

ただし、これはすでに故人として物語の中に登場する人物は除いたものであり、故人と

して登場する人物を含めれば、更にその数が増えるはずである。ここでは、脇役の人物でも実際に物語の中に登場し、その死が物語の中に描かれている人物だけを取りあげてみる。

この二十四人という数字の中には、光源氏や朱雀院などのように「幻」巻から「匂宮」巻まで、八年間の空白の間に亡くなったとされる人物も含まれている。この人物達は亡くなった時期や場所なども確かではないし、死の原因や臨終の場面の描寫などについても全く言及されていない。しかし、この八年間の空白の間に亡くなったとされる人物はほとんどが『源氏物語』の重要人物であるし、その人物が実際に物語の中に登場しているので、やはり考察の対象とした。

### 3. 夕顔・葵の上・一條御息所・紫の上の死期について

先述したように、『源氏物語』の正編の中で亡くなったとされる登場人物は全部で二十四人いる。その中で、その人物の死に直接物の怪が関わっているのは、夕顔・葵の上・一條御息所・紫の上の四人である。この四人の登場人物は、その人物が病氣を患ったり、死ぬまでの経緯の中に物の怪との関連が大變緊密な方である。そして、彼女達が死ぬ直接の原因も物の怪となっている人物である。本考察ではこの四人の死の場面について、特にその死期に重点をおいて詳しく考察してみる。

まず夕顔の場合から見てみると、光源氏と夕顔が荒れた某院に一緒に行って、宵を過ぎる頃、枕元に「いとをかしげなる女」が現れ、そばにいた夕顔を引き起こそうとする夢を見る。この後、

「この女君いみじくわななきまどひて、いかさまにせむと思へり。汗もしとどになりて、我がの氣色なり」(「夕顔」二三八頁)<sup>1)</sup>

といった夕顔の様子が、やがて

「かい探りたまふに、息もせず。引き動かしたまへど、なよなよとして、我にもあらぬさまなれば」(二四〇頁)

---

1) テキストは日本古典文學全集本の『源氏物語』(小學館 1980年)を使用した。以下、本文の中に引用される『源氏物語』の原文はすべてこれによるものである。

のような瀕死状態に陥り、とうとう

「添ひ臥して、ややおどろかしたまへど、ただ冷えに冷え入りて、息はとく絶えはてにけり」(二四一頁)

と、その死が確認されるに至る。このように他の死者に比べて、夕顔の死の場面の描寫は非常に詳しく、死んだ時期もはっきりしている。

八月十五日の夜に源氏が夕顔の家に宿ったという記述があり、源氏が夕顔を連れて某院に行ったのは次の日のことである。従って、夕顔が「いとをかしげなる女」の物の怪に襲われて命を落としたのは、八月十六日の宵過ぎる頃であったことが分かる。

次は葵の上について考察してみたいと思う。葵の上が六條御息所の物の怪によって出産後あっけなく亡くなったことは大變有名な話である。

殿の内人少なにしめやかなるほどに、にはかに、例の御胸をせき上げていいたうまどひたまふ。内裏に御消息聞こえたまふほどもなく絶え入りたまひぬ。(「葵」三九頁)

出産の時に六條御息所の物の怪に悩まされた葵の上は、無事出産も終わり、源氏や左大臣家の人々がみんな参内した後で急に苦しみ出して、そのまま亡くなってしまう。葵の上の場合、死にいたるまでの描寫はかなり詳しい方である。死期の日には、本文にはっきり書かれてはいないが、前後の状況から八月十四日頃であると推測できる。

一條御息所もやはり「物の怪」にわずらい、死を迎えた人物である。

「心憂く。世の例にも引かれたまふべきなめり。何に我さへさる言の葉を残しけむ」とさまざま思し出づるに、やがて絶え入りたまひぬ。(「夕霧」四二四頁)

元々物の怪による病氣を患って病弱だった一條御息所は、娘の落葉の宮と夕霧の間に實事があったと誤解し、落葉の宮に對する夕霧の不誠實な態度に落膽してそのまま他界してしまうのである。一條御息所が亡くなったのは、八月の下旬頃だったと推測される。夕霧が小野を訪れて一條御息所の病氣を見舞ったのが「八月中の十日ばかり」(三八五頁)のことで、この日に小野に泊まった夕霧と落葉の宮の間に實事があったと誤解し、一條御息所が胸を痛めて他界してしまうまで、何日も経っていない。従って、一條御息所の死期が八月の下旬頃であることは確かである。

紫の上の場合直接的な死因ではないが、物の怪に取り憑かれたことが彼女の死に大きく影響していることは確かである。紫の上が亡くなったのは八月の十四日である。しかし、

彼女が六條御息所の物の怪に取り憑かれて突然発病したのは、女樂の後、つまり正月の二十日頃で、三月には二條院に移るが、日ごとに病氣は重くなる一方であった。四月、賀茂祭の日には危篤に陥り、この時現れた六條御息所の物の怪の發言で、病氣の原因が分かるのである。

その後、光源氏の熱心な看病により、紫の上は六月頃に小康を得ることになる。紫の上が実際に亡くなったのは、突然の発病から一年半も後のことで、翌年の八月のことになる。紫の上は物の怪に取り憑かれた大病以來、病がちになっていた。

紫の上、いたうわづらひたまひし御心地の後、いとあつしくなりたまひて、そこはかたなく悩みわたりたまふこと久しくなりぬ。(「御法」四七九頁)

「いたうわづらひたまひし御心地の後」とは、紫の上が前年六條御息所の物の怪に取り憑かれたことであり、そのせいでひどく體が衰弱していたとされる。

さらに、彼女の死の場面を見ると、

さきざきもかくて生き出でたまふをりにならひたまひて、御物の怪と疑ひたまひて、夜一夜さまさまの事をし盡くさせたまへど、かひもなく、明けはつるほどに消えはてたまひぬ。(「御法」四九二頁)

と描寫されており、物の怪という用語が実際の臨終の場面に使われているのも、注目に値する。このように発病から死にいたるまでの経緯を見れば、間接的な形を取ってはいるが、紫の上の死にも物の怪が確實に関わっていることは確かなのである。

ここで、私が注目したいのはこの四人の死期である。夕顔は八月十六日、葵の上は八月十四日頃、一條御息所は八月下旬頃、紫の上は八月十四日にそれぞれ死を迎えている。このように、死の最も大きな原因が物の怪となっている人物が、みんな八月に亡くなっているのは非常に興味深いことである。

しかも、二十四人の死者の中で八月に死を迎えているのはこの四人だけである。數ある死者の中でも、その死に直接物の怪が関わっている人物だけが、八月十五日を中心とした中旬あるいは下旬に亡くなっているということは注目に値する。これは、明らかに作者が意圖的にこのような構想をしたということを示している。

死に直接物の怪が関わっているためか、夕顔を除いた三人に使われている「物の怪」という言葉も目立って多い方である。「物の怪」という用例が使われている登場人物の中で、紫の上は十例、一條御息所は八例、葵の上は七例と、三人とも最も用例數の多い人物にあたる。これについては、資料2の表を参照してほしい。

＜資料2 - 「物の怪」という用語が使われている登場人物＞

登場人物	巻	合 計
紫の上	「若菜下」8例 「御法」2例	10例
一條御息所	「夕霧」8例	8例
葵の上	「葵」7例	7例
鬚黒の北の方	「眞木柱」3例	3例
女三の宮	「柏木」3例	3例
光源氏	「夕顔」1例 「若紫」1例	2例
藤壺中宮	「若紫」1例 「紅葉賀」1例	2例
柏木	「柏木」2例	2例
夕霧	「横笛」2例	2例
朧月夜	「賢木」1例	1例
弘徽殿太后	「明石」1例	1例
朱雀院	「若菜上」1例	1例
明石の中宮	「若菜下」1例	1例

#### 4. 四人の死期を構成した作者の意圖について

それでは、紫式部がなぜこのような構成をしたのかについて考えてみたい。『源氏物語』における女主人公達の死が八月に集中しているということは、しばしば指摘される場合もあるが、その原因や背景などについて論じている人は極めて少ない。そのため、意外とこれについて究明することは大變で、平安時代の作品や資料、論文などをほとんどすべて調べなければならなかった。

紫式部が意識的に登場人物の死を八月十五日前後に設定しているのは、當時の風習や民間信仰、または有名な説話などの影響があつたことだと思ひ、私はまず平安時代における様々な作品の中で、登場人物達の死期をはじめ、物の怪や怨霊が現われる季節などについて調べてみた。しかし、『榮花物語』や『大鏡』、『枕草子』などにはもちろん、他の作品からも人が死ぬ時期や物の怪が現われる時期と、八月との関わりは見つからなかった。すなわち、このような事実を見ると、四人もの登場人物の死をすべて八月に設定しているのは『源氏物語』だけの特徴であり、作者の意圖があつたことを確實に見せてくれる證據でもある。

さらに、物の怪に對する紫式部の考え方に大きな影響を與えたと思われるのが、『紫式部日記』における彰子出産の折の物の怪體驗である。しかし、この場面における物の怪出現の時期は九月の十日と十一日のことであり、ここからも八月と物の怪との関連性を導き出すのは無理であつた。

そこで、民俗學的なところから考察してみようと試みた。

まず、八月十五日の物の怪と言え、現代人はお盆のことをすぐ思い浮かべるはずである。盆には祖先の霊が訪れると昔から信じられており、物の怪との関連も深いように思われがちである。しかし、『源氏物語』に描かれているのは舊暦の八月のことであるため、今のお盆とは時期がずれる。

『國史大辭典』によると、「盆」は

一般に七月十三日より十五日か十六日まで行なわれる、先祖の霊を迎え祀る行事。盆は盂蘭盆會(うらぼんえ)の略で、盆會・靈祭(たままつり)・精靈祭などの名稱もあり、正月とともに日本の年中行事を代表している。・・・(中略)・・・民俗の上では、盆は、精靈をあの世から迎え、生者ととともに祀る靈祭で、ふつう舊七月を盆月としている。<sup>2)</sup>

とある。さらに、

平安時代中期には貴族社會において年中行事化している。

とあり、平安時代中期にはすでに盆が七月の年中行事になっていたことが分かる。

このように、平安時代においては、先祖の霊が訪れるという盆が七月にあったのである。舊暦の八月十五日は秋の最中にあたることから中秋と言い、觀月の好時節であった。そのため、古くから八月十五夜には満月の下で宴を催し、詩歌を詠ずることなどが行なわれたのである。

このように、現代におけるお盆の時期と『源氏物語』の八月十五日を結びつけるのには無理がある。

それだけではない。盆に訪れるのは亡くなった祖霊で、どちらかという、子孫を守るはずの霊である。そのような性質を持つ祖霊と、人間に祟りをなしたり害を與えたりする物の怪を結びつけて考えるのは少々無理が生じる。盆に来る祖先の霊なら、源氏が須磨に流された時に現われた桐壺院の亡霊などが性格的に近いが、これは「彌生の朔日に出で來たる巳の日」となっており、三月上巳の日のことである。

結果的に、『源氏物語』における八月の死を、盆に訪れる祖先の霊と結びつけるのには、いろいろ無理があるように思われる。

しかし、やはりこのような観点から、八月の死を説明されており、私に大きなヒントを與えてくれたのが三谷榮一氏である。『源氏物語』の主要人物達の死が八月に集中していることについて、三谷榮一氏は祖霊を迎える時期をもって、それを説明されている。

---

2) 『國史大辭典』(第十二卷) 吉川弘文館 平成三年六月

八月十五夜の「月見」は単なる風流の催ではなく、収穫の直前で初稻を供奠し農作の神である祖霊を迎える日でもあった。こうした靈魂を迎えるのは、怨霊に対する畏怖よりも、むしろその大きな靈威の農作に対する信頼であるが、それだけに靈魂を迎える折は妖怪も跳梁する季節でもあったのである。<sup>3)</sup>

これは明らかに盆を意識した發想であると思われるが、迎える靈魂が祖霊だけではなく、怨霊や妖怪などをも含めて考えられているところが興味深い。

さらに、三谷榮一氏は御霊會の時期についても指摘し、それと『源氏物語』の女主人公達の死の時期とを結びつけておられる。

いつの間になくなったかは明瞭ではないが、六、七月から八月の中旬頃にかけて行なわれる。これは佛教の盂蘭盆と習合して来たためであり、元來は舊八月十五夜を中心とする初稻供奠の行事で、祖霊を迎え、祭り、送るという行事であったものが、その供奠の中に盂蘭盆の意識とも習合し、餓鬼供養が行なわれるように、家の祖霊以外の御霊が跳梁する時期と考えたから、怨霊・御霊をなだめ鎮めるための儀式が行なわれるようになったのである。『源氏物語』の作者の物語の主要な女性の死の時期を考える心理に、これらの信仰や傳承が大きく影響していたことは否定できまい。<sup>4)</sup>

一般的に知られている御霊會の時期は五月二十日であるが、三谷榮一氏は御霊會の記述が見られる様々な文献を取り上げ、御霊會が六、七月から八月の中旬頃にかけて行なわれていたことを指摘されている。時期がぴったり一致してはいないが、三谷榮一氏のこのような考え方は注目に値する。

ここにヒントを得て、私はもう一度平安時代の作品を調べてみた。その結果、八月十五日に祖霊が訪れる、またはその日は靈魂を迎える日という民間信仰が基になっていると思われる話は、古典の作品の中にもしばしば見られたのである。

最も有名なのが『竹取物語』で、かぐや姫が昇天するのが八月十五日であった。さらに、『夜の寢覺』で、主人公の中君の夢に天人が天降って琵琶の秘曲を授けたのも八月の十五日である。

また、『十訓抄』には、康保四年に西宮右大臣高明が琵琶を弾いていると、唐の琵琶博士である承武が天空から飛來して秘曲を授けるという話が見られる。これもやはり八月十五日のことだったのである。

このように、現代の盆ではないけれど、平安時代にも八月十五日に靈魂が訪れるという

3) 「夕顔物語と古傳承」(講座『源氏物語の世界』第一集 二一八頁) 有斐閣 昭和五五年九月

4) 注三と同じ

信仰があったのである。これは、『源氏物語』に見られる八月十五日を中心とした死と物の怪との関連を説明するのに、非常に重要な手がかりを與えてくれる。

さらに、私は八月十五日という日にちと物の怪との関連性について、当時「鬼の出現する時期」として有名な話から導き出してみたいと思う。

夕顔の話に『伊勢物語』六段の「鬼一口」の話や、河原院の傳説などが影響していることは周知のとおりである。さらに、夕顔の急死事件の原話と思われるのが、『三代實録』の鬼の話である。『三代實録』の光孝天皇仁和三年八月十七日の條によると、

十七日戊午、今夜亥時、或人告、行人云、武德殿東縁松原西有<sub>レ</sub>美婦人三人<sub>一</sub>、向<sub>レ</sub>東歩行、有<sub>レ</sub>男在<sub>レ</sub>松樹下<sub>一</sub>、容色端麗、出來與<sub>一</sub>婦人<sub>一</sub>携<sub>レ</sub>手相語、婦人精感、共依<sub>レ</sub>樹下<sub>一</sub>、數剋之間、音語不<sub>レ</sub>聞、驚怪見<sub>レ</sub>之、其婦人手足折落在<sub>レ</sub>地、无<sub>レ</sub>其身首<sub>一</sub>、右兵衛右兵門陣宿侍者、聞<sub>レ</sub>此語<sub>一</sub>往見、无<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>其屍<sub>一</sub>、所在之人、忽然消失、時人以爲、鬼物變<sub>レ</sub>形、行<sub>レ</sub>此屠殺<sub>一</sub>、<sup>5)</sup>

とある。これは、鬼が現われて女を食って消えたという話であるが、その時期が八月十七日であることに注目したい。

さらに、この話が基になっていると思われる『今昔物語集』卷二十七第八の鬼の話も八月十七日である。

今は昔、小松天皇の御代に、武德殿の松原を、若き女三人打群れて、内様へ行きけり。八月十七日の夜の事なれば、月は極めて明し。而る間、松の木の本に、男一人出で來たり。此の過ぐる女の中に一人を引へて、松の木の木陰にて女の手を捕へて物語しけり。今二人の女は、「今や物云ひ畢て來る」と待ち立てりけるに、良久しく見えず、物云ふ音も爲ざりければ、何なる事ぞと怪しく思ひて、二人の女寄りて見るに、女も男も無し。此は何くへ行きにけるぞと思ひて、吉く見れば、只女の足手許離れて有り。<sup>6)</sup>

このような話は、当時一般的に知られていたもので、紫式部も當然知っていたと思われる。『三代實録』の鬼の話は夕顔の物の怪の話の基にもなっているが、その時期が八月十七日であることは注目すべきである。このような説話を踏まえた上で、紫式部は夕顔の死んだ日を八月十六日に決めて、さらに夕顔の後に物の怪によって死を向かえる女達の死期に劇的な効果を狙って一連の共通點を與えたのだと思われる。

また、この問題を『竹取物語』のかぐや姫の昇天と関連させて考えてみたい。『源氏物語』

5) 『増補六國史 三代實録』名著普及會 昭和五七年一〇月

6) 『今昔物語集三』(三一頁) 新潮日本古典集成本 新潮社 昭和五六年四月

の数多い女主人公の中でも夕顔と葵の上、紫の上は大變重要で印象深い登場人物達である。この女主人公達の死をより劇的に表現するため、作者は當時の人なら誰でも知っていたはずのかぐや姫の話を連想させる効果を狙ったのではないだろうか。

このような私の考えと同じ見解を見せているのが青井紀子氏である。彼女は『竹取物語』のかぐや姫の昇天との類似点をもって、その関連を説明されている。

これを源氏物語における紫の上に比してみると、病を得、ゆっくりと、しかし確実に死に近づいてゆく紫の上の様子をまのあたりにして深く嘆く源氏の姿は、竹取の翁の姿に重なる。この世の榮華を極めた源氏が能う限りをつくしてもなおとりとめることのできなかった紫の上の死は、月からの迎えであり、昇天であった。紫の上を失った源氏は、世俗的なものすべて、すべての人間関係を棄てる。竹取物語の帝のように。その後に出家と死があるであろうことは、雲隠巻が示唆していることである。このような観点から、源氏の理想性を支える紫の上の存在は、竹取物語を繼承發展させたところにみられるといってもいいだろう。その表れが、最愛の紫の上を、八月十四日のまどかな明らかな月の光の下に、たとえ目が涙にふさがれて、その光の一筋さえも見えなかったとしても、火葬の煙が空に上って、空しく雲や霞に紛れるのではなく、十五夜の月の世界へ歸した、と信じたかった心として讀めるように思う。<sup>7)</sup>

このように、青井紀子氏は、紫の上の死をかぐや姫の昇天にたとえ、その死が十四日になっていることの意味を説明されている。

さらに、

夕顔も、しばしばかぐや姫、あるいはその昇天によそえられてきた女君であるから、重ねての説明は不要であろう。<sup>8)</sup>

と、かぐや姫の昇天と夕顔の死の共通点についても指摘しておられる。また、青井紀子氏は葵の上に對しても同じような見方で説明されており、これはよく納得のいく論理的な説であると思う。このような見方から考えてみれば、確かに夕顔や葵の上・紫の上の死が八月十五日前後になっていることが説明できる。

しかし、青井紀子氏は、女主人公達の死が八月十五日前後になっていることは説明されているけれど、物の怪との関連については全く言及されていない。しかし、私はかぐや姫の物語との関連から、八月の死と物の怪との関わりも十分説明できると思う。かぐや姫は

7) 「月と死と」(『中古文論叢』十一號) 早稲田大學大學院中古文研究會 平成二年一月

8) 注七と同じ

本人の意志で自ら「月に歸った」のではなく、月から來た迎えによって、月へ「連れ戻された」のである。

夕顔や葵の上・紫の上・一條御息所はいずれも、年を取って自然に死を迎えたのではなく、「物の怪」という非自然的な力によって「あの世に連れて行かれた」のである。紫式部がかぐや姫の物語を意識して、意圖的に八月十五日を中心とした前後の日に女主人公達の死を用意しているのだとしたら、當然その死を迎える方法についてもかぐや姫の物語を意識したはずである。

かぐや姫が、月から來た迎えによって月に連れ戻されたのと同じように、女主人公達は「物の怪」によって物語の世界から消されている。この場合、夕顔や葵の上・紫の上・一條御息所に取り憑いた「物の怪」は、かぐや姫の「月から來た迎え」と同じ役割を果たしているのである。

このように、かぐや姫の昇天の日にちやその方法との関連から、紫式部が物の怪と關わりを持つ女主人公達の死をすべて八月に用意していることが説明できる。

かぐや姫の昇天は「月に歸る」ということだから、人間の場合、それは「死」を意味することになる。夕顔や葵の上・紫の上は、かぐや姫に匹敵する『源氏物語』の重要な女主人公である。紫式部は、かぐや姫が八月十五夜に月に歸ったのと同じように、八月十五日を中心としたその前後の日に女主人公達の死を用意することによって、當時の人なら誰でも知っていた「かぐや姫」の物語を連想させる効果を狙ったのではないだろうか。

## 5. 結

以上死に物の怪が直接關わっている四人の人物—夕顔・葵の上・一條御息所・紫の上—の死期について考察してみた。興味深いことに、夕顔は八月十六日、葵の上は八月十四日頃、一條御息所は八月下旬頃、紫の上は八月十四日にそれぞれ死を迎えている。このように、死の最も大きな原因が物の怪となっている人物が、みんな八月に亡くなっているのである。

しかも、二十四人の死者の中で八月に死を迎えているのはこの四人だけである。數ある死者の中でも、その死に直接物の怪が關わっている人物だけが、八月十五日を中心とした中旬あるいは下旬に亡くなっているということは注目に値する。これは、明らかに作者が意圖的にこのような構想をしたということを示している。

作者がこのような構成をしたのは八月十五日に祖靈が訪れる、またはその日は靈魂を迎える日という民間信仰が基になっている。平安時代にも八月十五日に靈魂が訪れるという信仰があったのであり、作者はそのような民間信仰をふまえているのである。さらに、作

者はかぐや姫の物語を意識して、意圖的に八月十五日を中心とした前後の日に女主人公達の死を用意しており、その死を迎える方法についてもかぐや姫の物語を意識している。かぐや姫が、月から來た迎えによって月に連れ戻されたのと同じように、女主人公達は「物の怪」によって物語の世界から消されているのである。

## 【参考文献】

- ・ 玉上琢彌(1974)『源氏物語評釋①~⑩』角川書店
- ・ 秋山虔他校注(1982)日本古典文學全集本『源氏物語①~⑥』小學館
- ・ 關みさを(1970)『源氏物語女性考』八木書店 p.175
- ・ 手塚昇(1966)『源氏物語再検討』風間書房 p.39
- ・ 秋山虔・編(1982)『源氏物語作中人物論(「別冊國文學NO. 13」)』學燈社 p.312
- ・ 吉海直人(1992)『源氏物語の視覚』翰林書房 p.217
- ・ 岩下光雄(1986)『源氏物語の本文と享受』和泉書院 p.339
- ・ 吉本隆明(1982)『源氏物語論』大和書房 p.115
- ・ 藤本勝義(1994)『源氏物語の<物の怪>』笠間書院 p.79

要 旨
-----

『源氏物語』の正編の中で亡くなったとされる人物は、全部で二十四人いる。その中で、死に物の怪が直接関わっているのは夕顔・葵の上・一條御息所・紫の上の四人である。興味深いことに、夕顔は八月十六日、葵の上は八月十四日頃、一條御息所は八月下旬頃、紫の上は八月十四日にそれぞれ死を迎えている。このように、二十四人の死者の中でも死の最も大きな原因が物の怪となっている人物だけが、八月十五日を中心とした中旬あるいは下旬に亡くなっているということは注目に値する。これは、明らかに作者が意圖的にこのような構想をしたということを示している。

作者がこのような構成をしたのは八月十五日に祖霊が訪れる、またはその日は靈魂を迎える日という民間信仰が基になっている。平安時代にも八月十五日に靈魂が訪れるという信仰があったのであり、作者はそのような民間信仰をふまえているのである。夕顔の急死事件の原話と思われるのが、『三代實錄』の鬼の話である。これは、鬼が現われて女を食って消えたという話であるが、このような話は當時一般的に知られていたもので、紫式部も當然知っていたと思われる。『三代實錄』の鬼の話は夕顔の物の怪の話の基にもなっているが、その時期が八月十七日であることは注目すべきである。このような説話を踏まえた上で、紫式部は夕顔の死んだ日を八月十六日に決めて、さらに夕顔の後に物の怪によって死を向かえる女達の死期に劇的な効果を狙って一連の共通点を與えたのだと思われる。

また、『源氏物語』の数多い女主人公の中でも夕顔と葵の上、紫の上は大變重要で印象深い登場人物達である。この女主人公達の死をより劇的に表現するため、作者は當時の人なら誰でも知っていたかぐや姫の話を連想させる効果を狙っている。

夕顔や葵の上・紫の上・一條御息所はいずれも、年を取って自然に死を迎えたのではなく、「物の怪」という非自然的な力によって「あの世に連れて行かれた」のである。かぐや姫が、月から来た迎えによって月に連れ戻されたのと同じように、女主人公達は「物の怪」によって物語の世界から消されている。この場合、夕顔や葵の上・紫の上・一條御息所に取り憑いた「物の怪」は、かぐや姫の「月から来た迎え」と同じ役割を果たしているのである。

キーワード：『源氏物語』、死、物の怪、夕顔、葵の上、一條御息所、紫の上、死期
--

투 고 : 2003. 11. 27
--------------------

2차 심사 : 2003. 12. 19
----------------------

3차 심사 : 2004. 1. 8
--------------------

住 所 : (323-812) 충남 부여군 규암면 합정리 430 한국전통문화대학교 교양학과

電 話 : 041-830-7373

E-mail : sirayuki@hanmir.com